

第47回日本小児皮膚科学会学術大会 を終えて

(2023年7月15・16日, 大阪国際会議場)

金子 一成

関西医科大学小児科学講座教授

はじめに

この度、第47回日本小児皮膚科学会学術大会の会頭を仰せつかり、副会頭の谷崎英昭教授[関西医科大学(以下、関西医大)皮膚科学講座]とともに、2023年7月15日(土)・16日(日)の2日間、大阪国際会議場で開催いたしました(写真1)。当初は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を懸念し、現地とライブ配信のハイブリッド開催も想定していましたが、2023年5月8日に感染症法上の位置づけが5類相当に移行されたことを受け、会場での対面開催としました(主な指定演題はオンデマンドでも配信)。

初の大阪での開催ということもあり、どれくらいの方に夏の大阪にお越しいただけるか心配しておりましたが、376名(最終参加登録者数492名)もの会員の方々に現地参加していただきました。予

想を上回る参加者数で、参加された方にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

テーマは「小児における腸皮膚相関(Gut-skin axis)」

小児皮膚科学は新生児期から思春期に生じる皮膚疾患の診断、治療、そして予防を扱う学問です。本学会の学術大会は、小児の皮膚疾患の診療と研究を共通基盤とする皮膚科医や小児科医が一堂に会して、成果を発表し情報交換を行う場です。第1回大会が1977年に東京で開催されて以来、約半世紀の歴史を有する伝統ある学術大会で、会員数も発足当時の400名から1,500名を超えるまでに発展しました。この度、小児科医である筆者が本学術大会を担当させていただくにあたり、テーマを「小児における腸皮膚相関(Gut-skin axis)」とさせていただきます。「皮膚は全身の鏡」であること、そして「ヒトの健康における腸内細菌叢の重要性」が近年明らかにされていることから、このようにいたしました。

このテーマに沿って、理化学研究所生命医科学研究センターの大野博司先生には「腸内細菌叢研究の現状と展望～小児アレルギーを中心に～」と題した基調講演をお願いしました。

また特別講演では「腸内細菌叢からみたアンチエイジング」と題した講演を京都府立医科大学大学院医学研究科生体免疫栄養学の内藤裕二教授に



写真1 学術集会開会直前の会場入り口でのスナップ
左は副会頭の谷崎英昭先生、右は筆者



写真2 リーガロイヤルホテル
(大阪)の宴会場での会
員懇親会の風景

お願いしました。僭越ながら私自身も「常在細菌叢、特に腸内細菌叢が子どもの健康に果たす役割」と題した会頭講演をさせていただきました。

シンポジウムや教育講演、一般演題、 スポンサードセミナー

シンポジウムは「microbiomeとアレルギー疾患」、
「アトピー性皮膚炎の最新の治療」、そして「見逃し
てはいけない小児皮膚疾患」の3つのテーマで行い
ました。また共催シンポジウムは「こどもの未来を
考える～アトピー性皮膚炎、かゆみ、乳児血管腫～」
と題して開催しました。その他2日間の会期中に1
つの倫理講習、6つの教育講演、51の一般演題、6つ
の教育講演、10のスポンサードセミナー（共催シン
ポジウム1、モーニングセミナー1、ランチョンセミ
ナー6、イブニングセミナー2）と盛りだくさんの内
容で行いました。近年のアトピー性皮膚炎の新薬
発売ラッシュを受けて、全体としてはアトピー性
皮膚炎の治療戦略に関する話題が多かったように
思います。

おわりに

約3年半続いた新型コロナのパンデミックで学会

活動は自粛傾向でしたが、5類への移行を機に対面
開催とし、会員懇親会も行いました。会員懇親会は
学術大会初日の夜、会場に隣接したリーガロイヤ
ルホテル(大阪)の宴会場で盛大に行いました。懇
親会参加費を無料としたことや本学術大会で設け
た若手奨励賞の表彰式を兼ねたこともあり、約80
名の会員に参加いただき、久しぶりに親睦を深め
ることができました(写真2)。

最後に本学術大会開催に向けて、入念に準備し
てくれた関西医大皮膚科・小児科の教室員、専攻医、
研修医諸君や秘書の皆様、そして運營業務を委託
した日本コンベンションサービス株式会社関西支
社の方々に深謝いたします。また多大なるご支援
をいただいた関西医大皮膚科同門会(芳交会：谷崎
英昭会長)と小児科同門会(温仁会：卯西元会長)の
諸先生方にも厚く御礼申し上げます。